

## 妙一記念館本『仮名書き法華経』の声点

―同時期の字音直読資料との比較から知られること―

(広島大学) 佐々木 勇

### ○. 本発表の目的

本発表は、妙一記念館本『仮名書き法華経』の声点を同時期の法華経字音直読資料における声点と比較することで、当時の日本漢字音・漢語音資料中に位置づけることを目的とする。

#### 一、先行研究

○中田祝夫編(一九八八)。

妙一記念館蔵本「仮名書き法華経」(八帖)(以下、妙一本と記す)はわが鎌倉時代初中期の成立書写で、漢文原典を和訳訓釈し、仮名書き文に書き下したものとして甚だ優れている。労作以上の、傑作であるとさえ考えられる。これは従来全く知られることのなかった新出資料であるが、鎌倉時代の仏教社会における一方の輝かしい成果であると記しても、誇大な表現とは思えない。この資料を重要な国語史資料として、また鎌倉時代の仏教社会のある一面を物語る証拠資料として重視すべきであるとしたのはわたしの新見である。(影印篇上巻、中田祝夫の序文冒頭)

○沼本克明(一九九三)(沼本(一九九七)に修訂所収)は、「九条本法華経音の反切の分析によって導き出される各漢字の声調と、妙一記念館本法華経の漢語の各字に加点されている声調」とを対照した。その結果を、沼本(一九九七) 244・245頁から、左に引用する。

本書の漢字声調は、平安時代の法華経字音直読に伝承された字音(呉音)の声調を基盤にし、その去声一音節字が上声化した四声体系によるものである。

本書の漢字声調においては、上声または去声に下接する去声は語アクセント化を起こして上声化している。したがって「上去」「去去」の声調の組み合わせを持つ漢語は原則として存在しない。

以上の二現象は鎌倉時代初期の呉音資料に一般に認められるところであって、本書の加点が鎌倉初期頃とすることに矛盾しない。

更に、本書の漢語では入声点と平声点との混乱が見られるが、これはハ行転呼音を契機にして唇内入声字と平声「―う」韻尾字との区別が弛緩し、更にこの弛緩が入声と平声の全般に及んだためと考えられる。後々に、入声点の消滅した「名目抄」のような資料が出現するが、本書はその萌芽的なものと見なすことが出来、また、この現象は平仮名文という位相性を反映した本書の特徴と言えるかと思う。ここであえて特徴と言ったのは、同時代の他資料に比して異例が圧倒的に多いからであって、勿論数例の異例を見るものは他にも皆無ではないけれども、それらはハ行転呼音を契機とする唇内入声字と平声「―う」韻尾字を中心とする数例が散見されるに過ぎないのが一般である。

さて、以上の三現象を除けば、九条本との比較での異例率は、延べ例数で言うと、平↓上一・六%、

平↓去○・九%、去↓平二・四%、去↓入○・六%、の計わずか五・五%となり、全体として単字声調の揺れが非常に少ないものであったと言えるものである。

この五・五%の異例の理由については更に検討を加える必要があるが、この点に関しては所謂語アクセント化に関係する単字声調の変化によるものが含まれている可能性を僅かにうかがったにすぎない。

○小林芳規(一九九三a)・同(一九九三b)。

妙一記念館蔵『仮名書き法華経』の訓読法は、天台宗山門派のそれに一致する。

## 二、本研究の方法と対照資料

### 1. 本研究の方法

右の先行研究から、以下のことが知られた。

本資料は、鎌倉時代初中期成立書写の法華経和訳仮名書き文であり、類例の無い、重要な国語史資料である。その和訳文は、天台宗山門派の訓読法に基づく。

本資料は、伝統的な法華経音読の声調を基本的に反映している。しかし、「平仮名文という位相性を反映し」、伝統的な法華経音読の声調に合わない部分を含む。その原因の多くは、未解明である。

したがって、本資料の漢字音・漢語音を法華経音読史上・日本呉音史上に位置づけることに先立ち、同時代の字音直読資料との比較研究をなす必要がある。本発表では、それを行なう。

なお、本資料字音注の全体は、漢字音・漢語音データベースで公開予定である。それに向け、巻第五の途中までデータベースの書式で入力していたところ、坂水貴司氏から、全巻入力データの提供を受けた。ただし、語認定とデータ確認は佐々木が行なった。データの誤りは佐々木の責任である。

### 2. 比較対象の字音直読資料

妙一記念館蔵『仮名書き法華経』と同じ天台宗山門派の鎌倉初中期法華経字音点を比較することが望ましい。しかし、それは、現存しない。そこで、左の諸本と比較する。

A. 国会図書館蔵『妙法蓮華経』鎌倉中期春日版(WA3―8)巻第一―七・鎌倉中期朱声点

大東急記念文庫蔵『妙法蓮華経』鎌倉中期写本(24函120架0892号)巻第八・鎌倉中期朱声点

国会本は、鎌倉中期の法華経字音点として、沼本(一九八二)で使用されている(68・241・370・796頁)。

小倉肇(一九九五)では、「国会本丙・g」として整理されている。私も原本閲覧し、全巻移点した。現在、「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2610821>)で全文のカラー画像が公開されており、常に字音注の確認が可能であるため、これを比較資料として用いる。公開画像からも知られるとおり、朱声点より先に墨声点が加点された巻と墨声点が朱声点を補っている巻とがある。本発表では、全巻に加点されている朱声点を比較対象とし、墨声点も参照する。春日版であることと、声点の加点形式とから、南都の加点本であると推定される。

大東急本(巻第七・第八)は、国会本が巻第八無加点であるため、同期・同種の声点加点資料として、巻第八の朱声点を用いる。この大東急本の声点についても、沼本(一九八二)241頁で整理されている。また、小倉肇(一九九五)では、「大東急本戊・1」として採用されている。

なお、時代を遡った状態を知りたい場合、左の字音点二点を参照する。

B. 聖衆来迎寺蔵『妙法蓮華経』院政末期く鎌倉極初期加标点

天台宗寺門派の加标点である。本資料は、築島裕・小林芳規が原本調査しており、小林芳規（一九七〇）で活用された。沼本克明（一九七二）・沼本（一九八二）でも、「築島裕・小林芳規両先生の御移点本を拝借して調査した」として使用されている。

全体の画像公開はなされていないため、全巻を原本調査させていただいた。

C. 西教寺蔵『妙法蓮華経』院政期加标点

現存最古の字音直読『妙法蓮華経』訓点本である。天台宗山門派加标点の字音直読『妙法蓮華経』として唯一のものであるため、Bよりさらに古い点本であるものの、参照する。

全体の画像は未公開であるため、原本調査に依る。

三、声点加标点の実態と反映する声調の時期

1. 声点加标点と加标点形式

漢字交じり平仮名本は、漢字に声点を加点しないことが普通である。同じ『仮名書き法華経』であっても、同時期書写の天理図書館蔵『仮名書き法華経』巻第三や元徳二年（一三三〇）識語足利本『仮名書き法華経』八巻には、声点加标点が無い。特に、平仮名の振り仮名が振られた漢字に声点を加点した文献は、鎌倉時代に見出しがたい。本資料の漢語への声点加点は希少な例であり、分析する価値が存する。

本資料には、声点が加点された巻と無加标点の巻とが存する。巻第二の声点加标点が最も密である（後述）。

声点加标点巻——巻第二・五・六・七・八

声点無加标点巻——巻第一・三・四

本資料および比較資料の声点形式は、影印・公開画像および先行研究で明らかである。次に整理する。

◎ 妙一記念館蔵『仮名書き法華経』

四声を区別し、濁声点は「●●」を使用する。この声点形式は、鎌倉時代中期の呉音読資料における最も一般的な声点加标点形式であり、後世に引き継がれる。

平声点・入声点と比べてやや高い位置に加点された軽点のような声点も存するものの、一声調を示す体系的な加标点とは判断できない（四、1で検討する）

A. 国会図書館蔵『妙法蓮華経』鎌倉中期春日版（W A 38）巻第一く第七・鎌倉中期朱声点

大東急記念文庫蔵『妙法蓮華経』鎌倉中期写本（24・120・892）巻第八・鎌倉中期朱声点

国会図書館蔵本の朱声点は、沼本（一九八二）241頁でまとめられたとおり、毘富羅声・不入声を区別し、本濁「●●」・新濁「●●」を使用する。軽点も存する。墨声点も同期の加标点と考えられるため、朱声点が無い漢字への加标点例は、参照する。また、大東急本巻第八は、同期・同種の声点加标点である（これも、沼本（一九八二）241頁、参照）。

B. 聖衆来迎寺蔵『妙法蓮華経』院政末期く鎌倉極初期点

平上去入の四声と、平声軽とを区別する。濁声点は「●●」であり、新濁点を「○」「●」で示す。

C. 西教寺蔵『妙法蓮華経』院政期点

九条本法華経音・法華経单字の巻末点図に近い複雑・高度な声点加标点が実行されている（本清「●」・本

濁「一」・新濁「ㄥ」の外、本濁を清・清濁未決・清濁未決を清・清濁未決を濁・清濁任意を、それぞれ異なる形式の声点で区別する)。

四声と平声軽、昆富羅声・不入声を区別し、「唐音」(漢音)を示す漢字中央の「●」も存する。

## 2. 字音点全体における声点の割合

発表者は、呉音資料に声点が加點されはじめる十一世紀における声点加點状態について、調査・公表したことがある(佐々木勇(二〇二二))。その要点は、次のとおりである。

○字音直読資料は、仮名音注等より声点加點例のほうが多く、声点加點率が高い。

○漢文訓読資料の声点加點例は、仮名音注等の半数以下である。

○和化漢文訓読資料は、漢文訓読資料よりもさらに声点加點率が低く、仮名音注等の三分の一以下である。

○和文には、漢字にも仮名にも、声点は一切加點されていない。

本資料における仮名音注と声点加點漢字の延べ数を算出すると、つぎの表一のとおりとなる(左注の仮名音注は、含まない。踊り字は仮名音注とし、当該例に複数の声点が加點された漢字も一と数えた)。

(表一) 各巻音注加點漢字数(延べ数)

音注 巻	第二	第五	第六	第七	第八	計
仮名音注 (%)	5004 (66.4)	5178 (93.1)	5287 (87.1)	5085 (84.7)	4240 (80.8)	31672 (84.9)
声点 (%)	2527 (33.6)	384 (6.9)	785 (12.9)	916 (15.3)	1006 (19.2)	5618 (15.1)
計 (%)	7531 (100.0)	5562 (100.0)	6072 (100.0)	6001 (100.0)	5246 (100.0)	37290 (100.0)

本資料全体の声点加點率(15.1%)と比較して、巻第五は低く(6.9%)、巻第二は声点加點率が高い(33.6%)。比較の声点加點が密な巻第二では、仮名音注の半数程度の声点加點数が存する。先にも述べたとおり、漢字まじり平仮名文の漢字に声点を加點すること自体特筆すべきことであり、字音直読あるいは漢文訓読資料から声点を移点していることを推測させる。

とはいえ、原則としてすべての漢字に声点を加點し、仮名音注は僅少であるA国会本・大東急本鎌倉中期点とは、明確に異なる実態である。院政期の字音直読資料B・Cも、声点加點数に比して、仮名音注加點数は遙かに少数である。

なお、巻第八は、妙一記念館蔵『仮名書き法華経』において比較の声点加點率が高い巻である。しかし、巻第八中の陀羅尼には、振り仮名は存するものの声点は一切加點されていない。この点を沼本克明(二〇〇九)は指摘し、本資料の陀羅尼は、「四声を放棄して完全に日本化した読誦になった段階」である、とした。一方、A大東急本鎌倉中期点では、巻第八の陀羅尼にも声点を加點している。

本資料には、全巻漢字に振り仮名が振られている。しかし、声点を加點しない巻(巻第一・三・四)が存する。声点を加點した巻でも、字音直読資料に比べて声点加點率が低い。これは、漢字交じり平仮名文

資料と字音直読資料との位相差である、と考えられる。

### 3. 仮名音注と声点との前後関係

公刊された影印はモノクロであり、墨の本文と重なった朱声点・朱句切り点に存否不明の箇所が残る。そのため、原本閲覧で朱点を確認した。この原本調査によって、声点と振り仮名とが重なる場合、声点上に加点されていることが判明した。したがって、声点は、振り仮名の後に加点されている。

先行する振り仮名は、ほぼ全ての本行漢字右に振られており、一字の漢字にも「事(平濁)」(一 0178-6・0185-3・七 113-5等)<sup>1)</sup>「言(上濁)」(七 1081-3・1082-4・1084-3等)<sup>2)</sup>に加点されている。これによって、本資料本行は、字音語を漢字で書くことが原則であることが知られる(つく希に「こと」「ひと」などの訓が振られた例も存する)。なお、「法蓮華經」や漢数字「一」「二」「百」「千」など繰り返し出現する漢語は、振り仮名無加点の場合があるものの、異なる箇所の振り仮名加点例から、これらも音読されたと推定される。

よって、振り仮名に続けて加点された声点は、音種・音形を示すためではなく、声調・清濁を示す必要がある漢語に加点されている、と推測される。

### 4. 本資料声点が反映する声調の時期

#### ア. 字音語への声点

妙一記念館蔵『仮名書き法華經』の本行と右振り仮名および左注は、鎌倉中期の書写・加点と考えられている。原本調査によっても、そのように判断された。

しかし、振り仮名の後に加点された声点も同時期の加点なのかどうかは、検討の必要がある。

右に引用した沼本(一九九七)は、「一音節去声字の上声化」と「去声・上声直後の去声上声化」の二事象について、「加点が鎌倉初期頃とすることに矛盾しない」と判定していた。

また、「入声点と平声点との混乱」は、「平仮名文という位相性」故に、同時代の字音直読資料・漢文訓読資料よりも多い、としていた。とは言え、多すぎるのではないか。

この疑問に回答するように、沼本(二〇〇二)が書かれた。この論文中で、妙一記念館蔵『仮名書き法華經』同様、唇内入声字に平声点を加点する字音直読資料として、1 東寺蔵『仏説六字神呪王經』文永十一年(一二七四)点(金剛藏二二箱二二号)・2 仁和寺蔵『仁王護国般若經』(仮入箱)・3 東寺蔵『仁王護国般若經』(金剛藏一九四箱七号)三資料における具体例を挙げた。そして、「この種の資料の存在によって、字音読誦の場に於いても、鎌倉時代文永時代には確かに唇内入声音がハ行転呼されて、平声字と全く区別し得ない形にまで至っていた事を知る事が出来る」とまとめた。

鎌倉時代中期の字音直読資料にこのような加点資料が存するならば、妙一記念館蔵『仮名書き法華經』の声点が、本行・振り仮名と同じ鎌倉中期に加点されたものであっても不思議は無い。

呉音声調が反映する時期が平安・鎌倉時代のいつなのかは、去声字の上声化率で知ることができる。

沼本(一九九七)は、『九条本法華經音』の去声字に妙一記念館蔵『仮名書き法華經』にいかなる声点が加点されているかを整理した。『九条本法華經音』の欠落字(林史典(一九六九)参照)は、保延本『法華經单字』で補っている。<sup>3)</sup>

本発表では、『九条本法華經音』の去声字に限定せず、本資料における去声点・上声点加点漢字のすべ

てを対象とする。朱声点に先んじてその漢字に振られた平仮名音注に基づいて、当該字音の拍数を決定し、整理する。たとえば、当該字に「功徳」とあれば、「功」は一拍、「徳」は二拍と数えた（上接字声調の影響を除外するため、語頭の用例に限定した<sup>3)</sup>）。すると、結果は、表二の数となった。

(表二) 語頭の声点加点点数(被加点点漢字の延べ数)

拍数	声点	平声点	上声点	去声点	計 (%)
一拍	485 (51.9)	493 (88.4)	10 (1.4)	988 (44.8)	
二拍	447 (48.9)	65 (11.2)	706 (98.6)	1218 (55.2)	
計 (%)	932 (100.0)	558 (100.0)	716 (100.0)	2206 (100.0)	

表二のとおり、語頭字の全数は、上声加点点字と去声加点点字、一拍字と二拍字とで大きな差は無い。ところが、上声点は一拍字、去声点は二拍字に集中している(沼本(一九九七)、参照)。

平声点には拍数による差が見られないことから、本資料の去声点・上声点は、「一音節去声字の上声化」を反映した声点加点点である、と言える。

語頭の一拍字に去声点を加点了のは、左の十例である。

(表三) 語頭の一拍去声加点点例(墨は墨声点、毘はビフラ声)

1	圍(去) 遶(平)し	一 0338-5	圍(上) (〔墨〕 毘) 繞恭敬	一 29 — 11
2	志(去) 念し	一 0197-2	志(〔墨〕上) 念常堅固	一 7 — 2
3	離(去) 別(入)し	一 0300-3	與子離(〔墨〕上) 別	一 18 — 2
4	兒(去)	一 0319-2	名之爲兒(〔墨〕上)	一 26 — 22
5	功(去) 徳(入濁)	一 0179-1	如是等功(〔墨〕上) 徳	一 5 — 6
6	(同右)	八 1308-6	百千万億功(上) 徳已	八 0060c:19
7	終(去濁) 沒(入)し	一 0301-3	一旦終(去濁) (〔墨〕上濁) 沒	一 24 — 19
8	充(去) 遍(入)せり	一 0242-5	雜穢充(〔墨〕去濁) 遍	一 15 — 12
9	充(去濁) 滿(平)し	一 0261-5	衆苦充(〔墨〕去濁) 滿	一 18 — 16
10	(同右)	七 1167-5	充(去濁) 滿其願	七 18 — 3

右例1・2は、A国会図書館蔵『妙法蓮華経』で句頭字でありながら、上声点が加点点されている。3く

6もA国会本・大東急本では上声点が加点されている。これらは資料Aでは句中例であるためかもしれない。<sup>5)</sup> 7～10(終・充)は、A国会本にも去声点が加点されている。しかし、例7は、A国会本墨点は上声点である。

また、妙一本仮名書き法華経には、語中の一拍去声例を指摘できる。右と同形式の表にして、語例を掲げる。

(表四) 語頭以外の一拍去声点加点例

	妙一本	所在巻頁行	A国会本・大東急本	所在
11	受(平濁)持(去濁)し	二0289-4	但樂受持(「墨」上濁)	二23—5
12	蜈(上濁)蚣(去)	二0243-1	蜈蚣(毘)(「墨」上)蚰蜒	二15—13
13	蘇(上)摩(上)那(上)華油(去)燈(上)	八1281-3	蘇摩那華油(上)燈	八0059623
14	瞻(平)蔔(入濁)華(上)油(去)燈(上)	八1281-3	瞻蔔華油(上)燈	八0059624
15	善(平濁)功(去)徳(入濁)	八1311-6	諸善功(上)徳	八0061a01
16	命(平)終(去濁)	二0275-1	其人命終(「墨」去濁)	二21—3
17	(同右)	七1145-2	命終(去濁)之後	七13—21
18	侍(平濁)從(去濁)	八1286-4	侍從(去濁)親近	八0059616
19	羸(平)瘦(去)し	二0340-5	飢餓羸瘦(「墨」平)	二29—16

表四・例11～15は、資料Aにおいては、ビフラ声または上声点が加点されている。

1～15の範囲では、妙一記念館蔵『仮名書き法華経』への声点のほうが、A国会本・大東急本よりも古い呉音声調を反映している、と言える。

右例の大部分は、沼本(一九九七)229・230・248頁にも挙げられている。沼本(一九九七)は、右は例外であり、「去声一音節字は上声化を完了している」(230頁・248頁)とした。

しかし、僅かではあっても、一拍字への去声点加点例が存し、それは語中にも見られるのであるから、上声化は完了していない。<sup>6)</sup>

本資料の声点加点は、呉音声調一拍去声が完全に消滅する直前の状態を反映する。

#### イ. 和語への声点

本資料巻第五・六・八には、少数ながら、和語への声点加点も見られる。<sup>7)</sup> まず、出現順に、声点加点例・所在・法華経本文該当字を記す。

ㄱ(上)く(平濁)「告」(五0730-2) か(平)み(上)「上」(六0914-3) き(上)は(上濁)め(平)から(平)し(上濁)「不黄」(六1001-1) か(上)く(上濁)「聞」(六1029-4) き(上)は(平濁)「牙」(八1253-3) ㄱ(上)め(上)「爪」(八1253-3) な(上)「名」を(平) (八1248-5) 順(平濁)せ(上)す(去)「不」(八1278-3)

右を、拍数・品詞で分けて整理すると、つぎようになる。

〔一拍名詞〕	〔名〕な (上) (八 1248-5)		
〔二拍名詞〕	〔上〕か (平) み(上) (六 0914-3)	〔牙〕き (上) は (平濁) (八 1253-3)	
〔一拍動詞〕	〔爪〕ひ (上) め (上) (八 1253-3)		
〔二拍動詞〕	〔す〕順(平濁)せ(上)す (去) じつ (八 1278-3)		
〔三拍動詞〕	〔告ぐ〕つ (上) く (平濁) (五 0730-2)	〔聞ぐ〕か (上) く (上濁) こと (六 1029-4)	
〔助動詞〕	〔黄ばむ〕き (上) は (上濁) め (平) から (平) し (上濁) (六 1001-1)		
〔助詞〕	〔不 (ず)〕す (去) して (八 1278-3)	〔不 (じ)〕し (上濁) (六 1001-1)	
	〔を〕を (平) (八 1248-5)		

一拍名詞第二類「名」の上声点、その「名」に着く助詞「を」の平声点、その他の語に加点された声点  
が示す声調は、『類聚名義抄』『四座講式』時代の和語アクセントに一致する。<sup>8)</sup>

右のように、本資料の和語に加点された声点も、体系変化前のアクセントを反映しており、鎌倉時代初期の加点と考えて矛盾は無い。

以上の検討から、本資料の声点は、本文書写と同時期・鎌倉時代初期の漢字音・漢語音声調を反映しているものとして扱えることが判明した。

#### 四、本資料声点の分析

##### 1. 軽声点の有無と声調体系

法華経字音点における軽声については、沼本(一九八二) 424頁以降で検討済みである。この検討で、法華経字音点では、平声軽は「一切」に限り、入声軽は「上接字が上声または去声、下接字が上声、の場合に本来の入声重が変化して現れる」(沼本(一九八二) 434頁) ことが明らかにされた。

妙一記念館蔵『仮名書き法華経』に、「一切」の「切」に平声軽点加点例は無い。

A国会本・東急本『妙法蓮華経』・B聖衆来迎寺蔵『妙法蓮華経』・C西教寺蔵『妙法蓮華経』は、「一切」の「切」に平声軽点加点例を持つ。

一方、妙一記念館蔵『仮名書き法華経』には、入声軽の位置に加点された左の五例がある。

周(上)市(入軽)し (0218-1) 菩(上)薩(入軽) (1221-2) 菩(上濁)薩(入軽) (1221-6) 多(上濁)千(上濁)億(入軽) (1248-4) 黒(入軽)齒(平) (1273-6)

最終例以外は、上声に続く例であり、その影響によって高調化したものかもしれない。しかし、全5618例中の五例でしかなく、「黒(入軽)齒(平)」の例も存するため、入声点を加点する意図でその加点がずれた可能性を否定できない。よって、上接字声調の影響を受けた軽声は確例が存するとは言えない。

妙一記念館蔵『仮名書き法華経』の声点が反映する声調は、四声体系である。

この点、同時期の字音直読資料とは異なる。

##### 2. 濁声点加点率

発表者は、漢音読資料における声点による清濁標示率(濁声点加点率)を調査したことがある(佐々木勇(二〇〇六))。呉音読資料についても、十一世紀加点資料については、調査結果を公表した(佐々木



勇(二〇二三)。この調査によって、日本呉音の頭音を「清濁」として捉えることが十一世紀末期加本(丹生都比売神社蔵『妙法蓮華経』墨点、海の見える杜美術館蔵『妙法蓮華経』朱声点)以降徹底することが知られた。

本発表の対照資料としたA『妙法蓮華経』鎌倉中期点・B聖衆来迎寺蔵『妙法蓮華経』院政末期く鎌倉極初期点・C西教寺蔵『妙法蓮華経』院政期点は、新濁・本濁をも区別し、いわゆる清濁を原則として区別している。

これに対して、妙一記念館蔵『仮名書き法華経』は、清濁をどの程度区別しているのであろうか。

呉音で濁音となる諸字<sup>(9)</sup>について、連濁例を排除するため、語頭例に限った声点加點例を集計すると、次のとおりであった。

(表五) 日本呉音で濁音となる漢字への声点(被加點漢字の延べ数)

声点 卷	第二	第五	第六	第七	第八	計
单声点 (%)	50 (16.7)	3 (6.8)	15 (17.4)	4 (3.9)	15 (11.4)	87 (13.1)
濁声点 (%)	249 (83.3)	41 (93.2)	71 (82.6)	99 (96.1)	117 (88.6)	577 (86.9)
計 (%)	299 (100.0)	44 (100.0)	86 (100.0)	103 (100.0)	132 (100.0)	664 (100.0)

表五のとおり、巻による大きな相違は無く、一割から二割程度は、日本呉音で濁音となる漢字へ濁声点を加點しない。比較的加點例の多い語例を挙げると、つぎのようである。

成(去)就(平濁)し(1309-4) 成(去濁)就(平濁)し(1098-2・1316-5) 成(去濁)就(入濁)し(1242-6)  
 成(去濁)就(入濁)せましかは(0174-1) 成(去濁)就(平濁)せり(0225-1)  
 自(平)然(去)(0327-3) 自(入)然(去)智(平)(0235-6) 自(平濁)然(去)(0335-2・0739-6・1126-4)  
 自(平濁)然(去)(1157-4) 自(入濁)然(去)(0234-6)  
 妓(平)樂(入)(1281-2) 妓(平濁)樂(入濁)(0934-6・0981-2・1313-4・1327-5)  
 具(平)足(入)し(1309-4) 具(平濁)足(入)して(0189-5) 具(入濁)足(入)す(0263-5)  
 罪(平)報(平)(0274-6) 罪(平濁)報(平)(0274-2・0276-3)  
 財(去)富(平)(0237-1) 財(去濁)富(平)(0208-2・0219-3) 財(去濁)富(0223-5)

本資料に声点加點が存する巻第二・五く八の範囲で、右に挙例した「成就・自然・妓樂・具足・罪報・財富」の語頭字に、A『妙法蓮華経』鎌倉中期朱点が単点を加點した例は無い。

A『妙法蓮華経』鎌倉中期朱点にも、日本呉音で濁音の「佛」「第」「示」等に単点のみを加點した例が少数ながら存するものの、この濁声点加點密度の差は、漢字交じり平仮名文と字音直読資料の加點の位相差である、と考えられる。

### 3. 日本呉音濁音字以外への濁声点加點例

とはいえ、本資料も八割く九割は当時の漢語濁音を示している。本項では、それに着目する。

## ア. 語中の例

本資料における連濁の実態を知るため、中国中古音全清字・次清字に対する語中二字目の濁声点加點例を抜き出す（三字目以降にも連濁例は存在するものの、単語認定が異なれば語頭例となり、結果が異なる。二字目に限定すれば、この揺れが少ないための処置である。梵語音写字は除外する）。

すると、先行研究で指摘されてきたとおり、*m*・*n*・*ng*韻尾字に続く漢字への濁声点加點例が抽出される。その一部を掲げる。

### 「上接字韻尾 m」

音(去)聲(上濁) (0180-6・1017-6・1023-5) 音(去)聲(上濁) (1106-2・1222-5) 金(去)色(入濁) (0178-4・1156-6) 嚴(去濁)飾(入濁) (0190-3・0218-3・0304-2) 嚴飾(入濁) (0315-1) など。

### 「上接字韻尾 n」

演(平)説(入濁) (0184-6・1065-2・1127-3) 堅(去)固(平濁) (0197-3・0285-5・0868-1) 算(平)數(平濁) (0192-2・0904-5・0996-5) など。

### 「上接字韻尾 ng」

恭(上)敬(入濁) (0182-4・0916-1) 恭(上)敬(平濁) (0271-4) 功(去)德(入濁) (0179-1・1308-6) 功(上)德(入濁) (0204-4・1242-6) 正(入)法(入濁) (0189-5) 正法(入濁) (0198-5・1079-2) 正法(平濁) (0195-2・0198-4) など。

右の諸語の下字には、A『妙法蓮華經』鎌倉中期朱点・B聖衆来迎寺藏『妙法蓮華經』院政末期く鎌倉極初期点・C西教寺藏『妙法蓮華經』院政期点においては、「新濁」の声点が加點されている<sup>11)</sup>。

ただし、上接字が陽韻字であればA鎌倉中期字音点は必ず新濁点を加點するわけではない。そして、その語に、仮名書き法華経が連声濁と思われる濁点を加點することがある。その若干例を挙げる。

### 「上接字韻尾 ng」

◎正(平)等(平濁) (八 1234-3)

右に対応するA大東急本鎌倉中期点は、「正(平)等(平)無(上)異(平)」(八 0057a17)であり、「等」に新濁点を加點しない。「正等」の連濁例は、現時点の漢字音・漢語音データベースでも見出せない。

しかし、当該箇所C西教寺藏『妙法蓮華經』院政期点は、「正(平)等(平)新濁」無異(平)である(B聖衆来迎寺本は無加點)。日国は、妙一本仮名書き法華経の右例を根拠に、「しょう・どう」[シャウ・:]【正等】の見出しを立てる。

◎往(平)返(入濁) (二 0245-5) 往(平)返(平濁) (五 0769-1)

右に対応するA大東急本鎌倉中期点は、「往(平)返(平)」(二 16―3・五 11―12)であり、「返」に新濁点を加點しない。これも、C西教寺藏『妙法蓮華經』院政期点は、「往返(平)新濁」(二 0014a09・五 0036b16)と新濁点である(B聖衆来迎寺本は、卷二は無加點、卷五は平声点)。この連濁例も、漢字音・漢語音データベースには見出せない。また、日国も見出しとしない。

これらは、本資料が叡山での古い法華経読誦音を伝えている可能性が有る<sup>12)</sup>。

また、中国語原音陽類字に続く例ばかりでなく、韻尾が無い陰類字に続くにも拘わらず、濁声点が加點された例が存する。左に挙げる。

### 「上接字中古音末音 n」

① 小(平)法(入濁) (二 0328-3) (日国は、「しょう・ぼう」「セウボフ」【小法】の見出しのもとに、「易林本節用集 [1597]」「小法 セウホフ」などの例を挙げる。)

② 守(平)宮(上濁) (二 0243-1) (当該例のヤモリの意味では、日国は「しゅ・きゆう」【守宮】を見出しとする。「掃部頭 (かものかみ) の唐名」の「しゅ・ぐう」の見出しに、「守宮」は、日国も挙げる。)

③ 姝(平)好(去濁) (二 0260-1) (日国は、「しゅ・こう」の見出しに、「妙一本仮名書き法華経」のこの例を挙げて、「しゅ・こう」ともとする。)

④ 妙(入)好(去濁) (二 0178-6) (日国は、「みよう・こう」「メウカウ」【妙好】の見出しのみ。)

⑤ 逃(平濁)逝(平濁) (二 0297-5・0336-6) (日国は、見出しを立てず。)

右の①～④「法・宮・好・逝」は、B 聖衆来迎寺藏院政末期～鎌倉極初期点・C 西教寺藏院政期点には、濁声点は加點されていない。

しかし、①②は、A 国会図書館蔵本には、「新濁」声点が加點されている(フ入は、不入声)。

① 樂著小法(フ入新濁) (二 28—4) ② 守宮(去新濁)百足 (二 15—14)

右に記したとおり、①②③は日国も連濁例を記す。その早期例が、仮名書き法華経に出現している。

これらは、鎌倉時代に入って ng 韻尾の鼻音性が弱化し u と同音になったため、ng 韻尾に続く従来の連声濁例が u に続く連濁例かのように思われ、原音 u の後にも連濁が生じた例であると解釈される。

そうであれば、次の唇内入声字に続く字への濁声点加點例も、唇内入声音が u と同音となったための連濁例である、と判断される。

「上接字中古音入声韻尾 p」

⑥ 雜(入濁)寶(入濁) (二 0218-3)

(日国は、「ぞう・ほう」「ザフ・」【雜寶】の見出しに、「妙一本仮名書き法華経」のこの例を挙げる。)

A 国会図書館本の対応例には、「雜」「墨」入濁―寶(「墨」平) (二 11—9) とあり、二字が音合符で結ばれ、「寶」に墨平声点を加點する。この資料における音合符は、促音を表示している(沼本克明(二九七五))。この例では、仮名書き法華経と A 国会本の一語化表示法に、連濁と促音との相違が存する。

右の諸例が連濁例であれば、次の濁声点加點例も、誤点ではないのかもしれない。<sup>13)</sup>

「上接字中古音末音 i・a・o 字への濁声点加點例」

⑦ 閉(平)塞(入濁) (五 0833-1) ⑧ 解(平濁)説(入濁) (七 1114-2) ⑨ 破(平)法(入濁) (五 0885-6)

⑩ 華(上)徳(入濁)菩薩 (八 1310-4) ⑪ 所(平)散(平濁) (二 0201-1)

ただし、⑥～⑩の連濁形は、A 国会本・大東急本鎌倉中期字音、漢字音・漢語音データベース、ジャパナレッジのいずれにも見出せない。後世の宗淵撰叡山板山家本法華経本も、⑥～⑩の下字に濁声点を加點しないため、今は、例を挙げるに留める。

## イ・語頭の例

本資料には、語頭にも、日本呉音濁音字以外への濁声点加點例が存する。これも、挙例する。

【全清】根(去濁)力(入) (二 0233-3) 嬉(平濁)戲(平)す (二 0245-5) 忽(入濁)然(去) (二 0248-3) 雕(去

濁) (二 0249-2・0252-6) 典(平濁)籍(入濁) (二 0290-4) 寡(平濁)女(平) (五 0785-2) 活(入濁)

し (五 0791-6) 兵(去濁)衆(平濁) (五 0818-3) 顛(入濁)倒(入濁) (六 0923-5) 蕪(上濁)油(上) (六

1036-2) 般(入濁)涅(入)槃(去) (七 1116-3) 歡(去濁)喜(平濁) (七 1118-3) 多(上濁)千(上)億(入) (八 1248-3)

「次清」出(入濁)時(上濁) (二 0191-2)

#### 4. 振り仮名と声点とのずれ

仮名書き法華経は、経本文を変更する場合がある。たとえば、左のごとくである。

「大正蔵本文」 「仮名書き法華経」

下至阿鼻獄 (六 0047c20) 阿(平)鼻(平濁)地獄(入濁) (六 1016-2)

右は、大正蔵が底本とする高麗蔵本文と日本古写版本本文との相違ではない。今回の比較資料A国会図書館も「下(平濁)至(平)阿(平)鼻(平濁)獄(入濁)」(六 19—10)であり、大正蔵本文に等しい。

仮名書き法華経が補った「地」に、仮名書き法華経は声点を加点しない。これが偶然なければ、通常は加点されない漢字まじり平仮名文の漢字に加点された本資料声点は、字音直読あるいは漢文訓読資料から声点を移点しているのではないか、との先の推測に符合する。

また、本資料には、つぎのような、振り仮名と声点とのずれが見られる。

財(去)富(平) (一 0237-1) 財(去濁)富(平) (一 0208-2・0219-3)

右相当例に、A国会本は、「財(去濁)富(平)」(二 9—16・11—13・14—12)と墨声点を加点する。

左例も同様で、A国会本は「復」に朱の入声点を加点している。

本資料 還(去濁)復(入) (七 1157-2・1157-4)

国会本 還(去濁)復(入) (七 9—15・15)

これらは、先に振られていた仮名音注に従わず、字音直読資料または訓読資料から声点を移点したことを示す例なのではないか。

本資料声点は、字音直読資料と比較して、入声字と他声字との出入りがあることが先行研究で指摘され、本発表でも、濁声点に不正確な例が含まれることを述べた。

ただし、それらの相違を、漢字まじり平仮名文資料と字音直読資料との字音の差、と単純に捉えることは危険である。本資料声点が示す声調が、伝統的な法華経読誦の字音声調(『九条本法華経音』や『法華経单字』から知られる声調)と大きな違いを見せないのは、法華経読誦の字音声調を移したためかもしれない。

#### 五、むすび

以上、妙一記念館本『仮名書き法華経』の声点が鎌倉時代中期の声調を反映するものであることを確認した上で、同時期の法華経字音直読資料における声点と比較した。

その結果、字音直読資料と左の相違点が見られた。

字音直読『妙法蓮華経』 仮名書き『妙法蓮華経』

○原則として全漢字に声点加点 ○声点を加点しない漢字のほうが多い

○毘富羅声・フ入声を区別する ○四声のみを区別し、毘富羅声・フ入声を立てない

○清濁を厳密に区別する ○清濁を区別するとは限らない

○新濁・本濁を区別する

○新濁・本濁を区別しない

○連濁は原則として連声濁である ○直読資料には見られない連濁例が存する

本発表は、妙一記念館本『仮名書き法華経』の声点を、日本漢字音・漢語音資料として活用するための基礎固めを目的としたため、声点が反映する漢字・漢語声調の問題に踏み込んでいない。

しかし、直読資料では句中の漢字が、仮名書き法華経では語頭となるための去声点加点例の具体例は挙げた。また、直読資料では句中の連声濁例が、仮名書き法華経では語頭となるための非連濁例も存する。

妙一記念館本『仮名書き法華経』の字音データを本データベースで公開後、多くの皆様に諸観点から研究して頂きたい。

その際、本資料声点が漢字まじり平仮名文資料中の漢語という変容は蒙っているものの、伝統的な法華経読誦音の字音声調・清濁に基づいている可能性を考慮すべきである。

注

(1) 用例所在は、漢数字で巻数を記し、複製本の頁数・行数を算用数字で示す。以下同。

(2) 沼本(一九九七) 246頁に「九條本法華経音」(及び「保延本法華経单字」)の反切を分析する」とある。

(3) 振り仮名の明らかな誤写は修正して、集計した。表の数値は、一語の認定法によって変化する。語認定をした本資料のデータ全体は、近く、漢字音・漢語音データベースに公開する。

(4) A国会本の所在は公開画像の巻数・頁数・行数で示す。A東急本は画像公開されていないため、大正蔵の所在を記す。以下、同。

(5) 佐々木勇(一九八七) 204頁、参照。

(6) 沼本(一九九七) 248頁が挙げる「終しゅう(去濁)(平)始し(平)」(六 1004)は、振り仮名「しゅう」であるため右の例に含めなかった。しかし、「しゅう」は同時に加点されている漢音声調平声を示す平声点に対応する漢音形であると考えれば、これも、語頭の一拍去声点加点例となる。

(7) 巻第二末に、「おきおき」(二 0366)の「き」の上声点の位置に朱点が存するものの、和語の第二音節のみに声点を加点した例は無いので、声点と認定しないこととする。

(8) 金田一春彦(一九六四)、秋永一枝ほか(一九九八)等、参照。二拍動詞第一類「かぐ(聞ぐ)」の院政・鎌倉時代連体形は、HHである。なお、「ずして」の「ず」「して」ともに下降調の譜を着ける(『金田一春彦著作集』第五巻390頁)。「類聚名義抄」は、「シテ」に「上平」の声点を加点する(高山寺本「而」・蓮成院本「将」)。この「して」の「し」下降調実現のため、「ずして」の「ず」後のアクセントは上昇したはずであり、それを捉えて「ず」に去声点を加点することもあり得る、と解釈する。

(9) 日本呉音形は、『三省堂五十音引き漢和辞典』(二〇〇四年)に示した。本発表では、『広韻』不記載の「盆・姝・「月扁」・閔・倦」は、対象外とした。なお、『韻鏡』の全濁字であっても、「荷・華・奇・巨・競・狂・禽・慧・狐・巷・囚・愁・床・誓・石・撰・旋・船・値・稚・薄・疲・和・惑・咀・憔・懷・牀・狹・籌・唇・舊・賤・踐・蹲・迴・颯・嶮・長(平声)・分(去声)」は呉音で濁音とならず、『韻鏡』全清字「欣・江・告・終・深・先・増・夫・囑・縱・懈・辟・箭(去声)」・次清字「充・欺」は呉音濁音である。

(10) 字音直読資料の単声点も、直ちに頭音清と結びつけることはできない。字音直読資料のデータも、本データベースを増やしたい。

(11) これら、字音直読資料の新濁点にも揺れが有る。同一文献内の同一語にも、新濁点加点例と濁点加点例とが存する。

(12) その他、「貧ひん(去濁)窮きゆう(上濁)困こん(入濁)苦く(平)」(二 0227-1)の「困」に濁声点を加点する例が有る。これは、対照した

字音直読資料には濁声点加例が無い。仮名書き法華經において、四字一句をそのまま本文に取り込んだ二字目「窮」の韻尾の影響で、三字目「困」が連声濁となった例かと思われる。

- (13) 本資料の濁声点には、誤点も存する。たとえば、「欺(上)誑(平濁)」「(八1279.1)は、「欺(上濁)誑(平)」「(二0179.5)の例も存し、濁声点の位置がずれたものであるかと思われる。日国は、「ご・おう」「・ワウ」【欺誑】の見出しのみで、宗淵撰叡山板山家本法華經も「欺(上濁)誑(平)」である。

#### 【参考文献】

- 秋永一枝ほか(一九九八) 『日本語アクセント史総合資料』(東京堂出版)
- 沖森卓也・三省堂編纂所(二〇〇四) 『三省堂五十音引き漢和辞典』初版(三省堂)
- 金田一春彦(一九六四)(二〇〇五) 『四座講式の研究』(三省堂。後、『金田一春彦著作集』第五卷(玉川大学出版部)所収)
- 小林芳規(一九七〇) 「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」(広島大学文学部紀要) 29巻1号)
- (一九九三a) 「妙法蓮華經訓読史叙述のための基礎作業」(訓点語と訓点資料) 90輯、一九九三年一月)
- (一九九三b) 「妙法蓮華經の訓読史から見た妙一記念館本仮名書き法華經」(中田祝夫編(一九九三) 収載)
- 沼本克明(一九七二) 「日本漢字音に於ける連濁と声調との関係」(広島大学文学部紀要) 31巻1号)
- (一九七四) 「法華經吳音読に於ける輕声について」(信州大人文学論集) 08。沼本(一九八二)に改稿収載)
- (一九七五) 「漢字音に於ける促音の表示法」(国文学攷) 69。加筆修正して、沼本(一九八二)に収載)
- (一九八二) 『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院)
- (一九九三) 「妙一記念館本仮名書き法華經の漢語声調」(中田祝夫編(一九九三) 収載)
- (一九九七) 『日本漢字音の歴史的研究』(汲古書院)
- (二〇〇二) 「東寺系吳音直読資料に於ける四声点の特色」『声明譜本の日本語史的研究』(平成二〇〇二年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書) 所収)
- (二〇〇九) 「法華經の陀羅尼の読誦について」(安田女子大学大学院文学研究科紀要 日本語学日本文学専攻) 14、二〇〇九年三月)
- 佐々木勇(一九八七) 「吳音一音節去声字の上声化の過程」(鎌倉時代語研究) 10)
- (二〇〇六) 「鎌倉時代の日本漢音資料における濁声点加例について」(『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』(汲古書院) 所収。佐々木勇(二〇〇九)に加筆修正の上、収載)
- (二〇〇九) 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』(汲古書院)
- (二〇二三) 「十一世紀加声点から知られる日本吳音の位相差——信州大学日本語学夏季セミナー講演記録——」(『信州大学人文科学論集』 11(1))
- 中田祝夫編(一九八八) 『妙一記念館本 仮名書き法華經 影印篇』上巻・下巻(靈友会)
- (一九九三) 『妙一記念館本 仮名書き法華經 研究篇』(靈友会)
- 林 史典(一九六九) 「九条家本法華經音の脱落部について」(『国語学』 79)

(以上)